



医療法人社団 重仁 佐々木病院

祝45周年特別号

No10
2015年
3月号

「ささえ～る」

広報委員会

※『ささえ～る』とは、「佐々木」・「ささえる」・「エールを送る」の意味を込めた造語です。



佐々木病院は、昭和44年12月に85床でスタートしました。昭和48年、南病棟を増築し126床に増床、昭和61年には北病棟を3階に増築し143床に増床しました。また、平成9年に西病棟の増築と外来玄関を改築しました。平成14年には、併設のフィールド・ラベンダー（障がい者福祉サービス事業所）を開設し、平成22年10月にデイナイトケア（アンダンテ）・作業療法施設を開設しました。平成22年12月、143床から139床に変更し、患者様の療養環境改善を図り現在にいたっております。



理事長

青木伸弘

佐々木病院創立45周年、おめでとうございます。生き残りの半端無い医療業界にあって半世紀近く経営を継続できるという事、職員の皆様の並々ならぬ努力の賜物だと思います。

昨年4月より、理事長という重責を預かるようになり、今日まで病院に係わり合った職員の皆様に、本当に感謝と共にお礼を述べたいと思います。

佐々木病院での投稿は初めてです。私の簡単な自己紹介をしたいと思います。

私は、富山市の「西田地方」という地名の場所で生まれました。母の実家です。祖父は弁護士をしていて、裁判所の前に家がありました。先日、タクシーに乗りいってきましたが、微かな記憶が蘇るような場所があり、懐かしく当時を思い出しました。祖父は私が小学校2年時に「胃がん」で亡くなりました。私が2歳の時に父の仕事の関係で横浜に移り住みました。父は高岡市福岡町の「八幡神社」の長男で、祖母から医者になるようにと小さい時から言われ続けていたそうです。何故なら祖母が「イタイイタイ病」の荻野医師の親戚だそうで、1浪後に金沢大学医学部に入学、卒業しました。

父は医者でしたが、私は医者になりたくなかったのです。しかし、母親の一言で医学部を受けることにしました。その一言とは「勉強をしたくないので受験から逃げるのなら、医学部に受かってからやめなさい！」でした。その言葉に反応して、1年間頑張った訳です。医者になりたくなかったのは、父が開業してから家と同じ敷地内の医院に入院患者様も居た為、忙しう家と職場を出入りし大変そうなのと、プライバシーが全くない生活に魅力を感じなかったからです。

では、何になりたかったかと言うと、単純に落語家、ミュージ

シャン、放送作家のような職業を思い浮かべていました。ですから、大学入学と同時に音楽学校に通い、ドラムを習い始め高校の友達とバンドを2年程組んでいました。今風の若者と何ら変わらなかった訳です。一流のバンドとも共演したこともあり、今では良い思い出となっています。

そんな人生を続けたかったのですが、取りあえず、医学部もそれほど勉強が厳しくなかったのも、医学生を続けることにして、日本医大を卒業しました。卒業してからは医学生として勉強してこなかったのも、医者として優秀な医者にならなければとの想いに駆られ、大学院を希望しました。当時、大学では教授が大学院入学を推薦してくれていた科があり、それが「日本医大第1外科学教室」でした。入学後、教授の命令で即刻、基礎医学を「慶應大学医学部微生物学教室」で習い、「無菌動物とウィルス」をテーマに実験に明け暮れていました。臨床と比べると地味ですが、基礎は本当に学問をしているという実感が湧き充実していました。

3年ほど基礎医学を学び、4年目に大学に戻った頃、船のタンカーに乗る「船医」の話があり、太平洋の赤道まで出航しました。乗船2カ月後に下船をして中南米を約1カ月旅行し、最後にバンクーバーに約10カ月住みつきました。教授からの帰国命令で約1年後に大学に戻り、1年遅れで「医学博士」になりました。

帰国後は、大学や各派遣病院での研修生活を経て、「札幌医大心臓血管外科学教室」の特別研修生として約2年通い、その後医師を続けながら1989年から病院経営に係わり合っています。2002年には東南アジアのシンガポールの病院で1年半程臨床医をしていました。

これが私の簡単なプロフィールです。今後とも宜しく！



院長

菊野恒明

佐々木病院は平成26年12月10日で、創立45周年を迎えることができました。これも、日々頑張ってくれている職員をはじめ佐々木病院に関わってくださる皆様のおかげと、心より感謝申し上げます。

私の父は富山県高岡市で内科医院を開業していました。縁あって、私は佐々木病院に来ることになりました。佐々木病院は、昭和44年12月

10日、佐々木重行先生によって開設されました。平成7年、佐々木先生ご逝去。次女の野田真紀子先生があとを継ぎました。平成11年、法人化。医療法人社団重仁佐々木病院となりました。私は、平成22年5月から勤務し、10月には理事長になりました。院長も兼務しておりましたが、平成26年3月末に理事長職を辞し、院長職に専念することとなり今日に至っています。

佐々木病院は、郊外の佇まいを残しつつ交通の利便がよい、富山市南部の大町に位置しています。この立地条件を活かし、社会的入院・施設化・回転ドア症候群などを防止・予防し、安定した社会生活が可能となるように、デイケアや

訪問看護など、スタッフの特性・意欲・工夫に応じて地域に根差した様々な医療活動を行っています。さらに、地域生活の一助にと願い、社会復帰施設「フィールド・ラベンダー」も運営しています。

現在の佐々木病院は「外来部門」、「病棟部門」、および社会復帰を支援する「福祉部門」に分かれており、各部署それぞれが掲げる目標に向かって、日々努めております。診療部長の中村主計先生、医長の岡本勇香先生をお迎えし、医局のマンパワーが充実しました。それに伴って看護の質もアップした感じがします。つぎなる課題は教育ないしは学習であると、常々申し上げているところです。スタッフの質の向上が、病院の提供するサービスの質の向上に直結していると考えます。

地域医療の中にしっかりと足を下ろし、選ばれる病院を目指して、半歩後ろから寄り添う穏やかな伴走者として、自らを磨いて行きたいと思っております。

今回45周年にあたり、皆様と一緒に佐々木病院の45年間の歩みを振り返りたく、特別号を発行することとなりました。今後とも、佐々木病院をよろしく願い申し上げます。

入職してからを振り返って

看護部長 町野

私自身看護師になった頃は、精神科に勤務するとはこれっぽちも考えていませんでした。それが佐々木病院に入職し、はや10年近く経とうとしています。その間看護師としての経験があるにも拘らず、精神科看護の奥深さ、難しさを感じ辞めようと思ったことも幾度もありました。しかし、佐々木病院のスタッフ、患者様に支えられ振り返るとあつという間だった気がします。

私が入職した頃は、院内行事の一つにバス旅行がありました。入院患者様のほとんどが参加され、ぶどう狩りに行ったり、水族館にも行きま

した。普段の生活と違い、患者様が生き生きとし最高の笑顔で楽しんでいたことが強く印象に残っています。

今では当病院も高齢化が進み院外行事は行われなくなりましたが、院内行事では職員一丸となつて、いろいろと趣向を凝らしながら患者様の入院生活に潤いを与え続けてくれています。患者様と共にある病院。今後も佐々木病院はそういう病院であり続けていけたらと思っています。



【昭和の患者様バス旅行風景】



【開設当時の調剤風景】

入職してからの一番の思い出

事務長 浦上

先日、広報委員会から「佐々木病院に入職してからの一番の思い出」の原稿依頼があり、久しぶりに入職してからの様子を頭の中に浮かべながら思い出にひたりました。

受付・医療事務として勤務したのが、私の社会人・医療人としての第一歩でした。

今思うと、患者様から「診察まだけえ！」とか「早くしてよ！」という、厳しい声や「大変やねえ～お疲れさま」とか「いつもありがとねえ」という、あたたかい声をかけられながら続けてきたのが当時の思い出として、浮かんできます。

楽しいこともたくさんありました。病院の行事では、職員と患者様とが丸となつて取組む姿がとても素晴らしく多くの感動がありました。

基本理念にも「患者さんに親身」の気風とありますが、こうした、すばらしい病院環境の中で仕事をすることができ、医療活動ができたことは、私の貴重な財産となっています。

自分自身、事務長職になって7年を迎えようとしています。病院創立50周年に向けてたくさんの教えを胸にお世話になった人々に感謝をしながら、日々研鑽していこうと思います。



【当時の脳波測定器】



【初期のレントゲン装置】



【初期の厨房風景】

入職してからあつという間の15年間

福祉支援課長 高松

平成11年4月に入職し、あつという間に15年が経ちました。最初の3年間は病院でのソーシャルワーカー業務を行い、平成14年フィールド・ラベンダー開設を機に、異動となりました。まだまだ経験も浅く、社会復帰施設での業務のイメージがつかないまま試行錯誤していたのを覚えています。それから11年間、就労支援や相談支援業務等を通じ、地域生活支援という貴重な経験をさせていただいたことを感謝しております。

そのなかでも、平成18年の障害者自立支援法施行に伴う施設移りの準備は苦勞した思い出があります。施設管理業務にも携わっていたので、移行に伴って利用者様が不利益にならないよう、サービスの質を低下しないよう気を張ったのを覚えています。

現在は病院ソーシャルワーカーとして勤務していますが、その頃の経験を生かし、これからも患者様のためにより良い支援を提供できるよう努力していきたいと思っています。

佐々木病院大運動会

第1病棟 浜屋

現在、「フィールド・ラベンダー」が建てられている場所に、以前は佐々木病院の「グラウンド」がありました。そこでは、「春」と「秋」に運動会を行っていたことを今では知る方も少なくなっていました。昭和50年10月1日の第1回より最後となった平成13年第51回まで、私はこの伝統ある「運動会」に毎回参加できたことを誇りに思っております。晴天のもと、先代の佐々木院長の挨拶から始まり、身が引き締まる思いで緊張しピリピリしながら取り組んだものでした。

当時は、患者様も大勢参加されており、「赤団」、「青団」、「白団」で構成され競技が行われました。特に盛り上がった競技は「綱引き」、「応援合戦」や「全員リレー」でした。私たち職員も各団に配置されており、職員同士で闘志をむき出しで奮起していました。患者様の行事ではありますが、若き日の自分も職員と共に楽しく本気で取り組んだことを懐かしく思い出します。

今では、運動会は過去の行事になってしまいましたが、今でも私の記憶の中には鮮明に残っております。患者様と共に体を動かしたこの思い出を大事にしていきたいと思っております。



【入場行進】



【選手宣誓】



【開会のファンファーレ】



【当時の手書きのプログラム】

手作り感のあるプログラム。第1回大会から作っていました。



【大いに盛り上がる綱引き】



【フォークダンス風景】



【各団の応援用看板】

出来が良かったので、運動会の後しばらく公道にむけて飾っていました。

ブルーキャッスルメン

第 1 病棟 井上

私が佐々木病院に入職し看護学校を卒業した後、自分の趣味であるアマチュアのジャズ・オーケストラのメンバーとして音楽に関わりました。縁あって、昭和49年から佐々木病院でのコンサートを行うようになりました。社会福祉活動として患者様の気分転換、癒しになればと慰問演奏会を年1回行い、当院では5回コンサートを行いました。日頃、生演奏のジャズ・オーケストラを聴く機会はなかなかありませんが、患者様の反応はよく、毎回患者様から新鮮で明るい表情を見て、私たちも元気をいただきました。



ブルーキャッスルメンは約24名編成ですが、佐々木病院のコンサートでは1人の欠席もなく慰問し、ジャズのみならず、演歌、ポピュラー、映画音楽など様々なジャンルの演奏を行い、患者様の楽しみの一つであったと思われます。

ブルーキャッスルメンは現在も小ホールでの定期的な演奏会を実施しております。機会があれば、佐々木病院での演奏も思っております。

病院行事の思い出

第 1 病棟 村本

昭和44年12月に佐々木病院が設立され、今日まで45年は「あっ」という間に過ぎた感じがします。今振り返ると、思い深いのは、ワンシーンばかりで連続して思い浮かばないのは…仕方ないことかもしれません。でも、心なしか達成感と懐かしい感じが脳裏に浮かびます。病院の療法、行事は45年に大川寺へ遠足に行ったのが始まりです。朝早くより病院奥様が厨房で手弁当作りに励んでおられたこと思い出します。12月のクリスマス会は北1階デイルームで、キャンドルサービス、職員患者様によるファッションショーやギター演奏。自分は尾崎紀世彦の「また逢う日まで」を熱唱したものです。当時22歳の若者でした。



【七夕祭り風景】



【開設当時のクリスマス会風景】

昭和46年にグラウンドが完成し、記念にソフトボール試合を行い、院長の前で、自分が第1号場外ホームランを打ってしまい、さすがに院長もグラウンドの狭さを感じられたようで、その後ホームランがグラウンドの外に出ないようにフェンスを伸ばされました。天気の良い日は、日課のようにテントを張り、ソフトに専念しました。

昭和50年頃より、南病棟の新築によりさらに行事が増え、入院患者様も増え、めまぐるしい活気ある時期だったように思います。行事にドラマ療法発表会を折り込み、日々練習に励んでいたこともありましたが、院内作業も段々増え、内職労働が主でしたが、患者様は作業が一番好きな療法だったようです。作業収益で、個人ランクの商品券を作り、展示即売会を行ったりして、意欲的になる患者様もいました。即売会で家へのお土産を買う患者様には心打たれました。



【開設当時の夏祭り風景】



【開設当時の職員たち】

今後も療法は進歩・変化していくと思いますが、療法の基本は、療法を通じてどのようにかかわって患者様を支援していくかだと思います。どんなことでも患者様を支えることができるなら、療法だと思って、今後もじっと見守っていけたらと思っています。

楽しかった職員旅行の数々

第2病棟 松橋

年1回の佐々木病院の職員旅行は、旅先の見学よりもバスの中や夜の宴会が楽しみでした。食べ物や飲み物を購入し、バスが来るや否や、楽しい会が始まります。バスの中は、それはそれはにぎやかな会です。お手製の赤飯やおはぎを持ってきて下さる方がおられ、毎回楽しみでした。

あまりに騒がしく、宴会をやめようとの意見もあり、夜の宴会がなかった職員旅行もありました。心身の鍛錬にと、永平寺と能登の総持寺に行きました。早朝から廊下はすり足で音を立てずに歩き、会話は禁止され、広い寺内と庭の掃除をし、座禅を組みました。座禅では、とろり…と眠りそうになり姿勢を崩すと、「ピシッ」と喝を入れられました。とても辛い座禅研修は、2回だけで中止となりました。

帝国ホテルでも宴会はなく、食事した後、部屋に戻ったのですが、誰がどの部屋にいるのか分からず、同室の方と2人で、東京の夜景を見ていました。暇つぶしに浴槽の掃除をしていたら、帝国ホテルに泊まって掃除をするのはあなたぐらいよと笑われました。

どんどころへ旅行したのか思い出しています。ライン下り、長良川の鶺鴒い、保津川下り、嵐山、渡月橋、幻想的な竹林の小径苔寺、天龍寺、鈴虫寺、大原三千院、清水の南禅寺、京都御所、東福寺の



通天橋から眺める紅葉は息をのむ美しさでした。もう一度行きたい場所です。磐梯の五色沼、中禅寺湖の紅葉も見事でした。上高地、日光の東照宮、鬼怒川温泉、松島、草津温泉、横浜、天橋立、城崎温泉、有馬温泉、姫路城、厳島神社、倉敷、神戸の六甲山からの100万ドルの夜景、奈良など。今までいろいろな所に研修旅行してまいりました。歌って踊って、食べて飲んで。部署も違い、普段あまり会話をしたことのない方も、一緒に旅をすることで、その方の意外な一面に触れ、親近感もわき、旅行は交流を深める最高の場だと思います。



心の健康歌声フェスティバル

外来看護 村井

当院では、開設当初から音楽に関して非常に力を入れていました。音楽療法をはじめ、ブルーキャッスルメンの演奏会や音楽鑑賞などさまざまな音楽に関する事に取り組んでいました。中でも、印象深かったことは、1989年に開催された「心の健康歌声フェスティバル」です。患者様と職員と一緒にフェスティバルに参加しました。今まで、楽器に触れたことのなかった患者様や職員も、一緒に楽器を習いながら練習し、当日は素晴らしい合奏を皆様に披露することができました。会場からは、温かい拍手が沸き起こり、その時の感動は今でも心の中に残っています。



医療法人社団 重仁 佐々木病院

住所 〒939-8073 富山県富山市大町1番地
電話 (076)425-2111 / FAX (076)425-2112
ホームページ <http://www.sasakihp.or.jp/>

アンダーテ

電話 (076)423-2114(直通)

指定障がい福祉サービス事業所

フィールド・ラベンダー

住所 〒939-8073 富山県富山市大町3-4
電話 (076)495-1555 / FAX (076)495-1666
ホームページ <http://www.field-lavender.net/>

編集後記

日本の高度経済成長期を経て45年。当院も社会環境の変化に対応しながら、訪問看護やデイケアの導入、精神保健福祉支援を行ってきました。編集を通じ、地域の地域社会と共存しつつ、常に患者様の立場にたって何をすべきかを考えてきた当院の歴史に触れる機会となりました。

今まで以上に患者様のよりよい環境づくりを目指し、より一層努力を積み重ねたく思います。

広報委員会 宮田